

平成13年度第2回企画展

新収蔵品展

～ 昔のくらし～



平成13年5月15日(火)～9月2日(日)

宮代町郷土資料館

開催にあたって

激動の20世紀も歴史の一ページとなり、世の中の変化は、ますますその速さをつのらせている感があります。

日々の生活の中で忘れ去られていく過去の中にも、人々が生きた証として残されたものが数多くあります。郷土資料館では、町民の皆様のご協力を得ながら歴史の「証言者」である資料の収集に努めております。

昨年度、郷土資料館には約130点の資料を寄贈いただきました。これらは、私たちの暮らしの移り変わりを静かに物語ってくれています。

今回の展示では、「昔の暮らし」をテーマに、寄贈いただきました様々な道具について、材質が変わったもの、方法が変わったもの、使われなくなってしまったものなどを展示しました。

この展示を通して人々の生活の移り変わりを知っていただき、郷土宮代への理解をより一層深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、ご寄贈いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

平成13年5月

宮代町郷土資料館

凡 例

1. 本書は、平成13年5月15日から9月2日にかけて開催する、宮代町郷土資料館企画展「新収蔵品展～昔の暮らし～」の展示解説図録です。
2. 本展示の企画構成並びに本書の執筆・写真撮影及び編集は、横内美穂が行いました。

生活の道具たち

私たちの生活のなかには、様々な材質のいろんな道具があります。今では、大量生産で物が作られ、気軽に手に入れることができます。

昔は、職人が手作りで作っていたため、こわれたときなどにはすぐに新しい物を買うのではなく、修理をして大事にしながら使用していました。

同じ目的に使っているものでも、昔と今では作られる材質が変わったものもたくさんあります。また、道具自体が改良され、より使いやすくなっているものもあります。

家にある道具たちがどう変化して今のようにになっているのか、比べてみてください。

オニオロシ

折原 一 氏寄贈

素材はスモモの木で作られています。大根などを粗く大量にすりおろすのに使います。今でも、「スミツカレ」（初午の日にする料理。大根を粗くすって、大豆と一緒に醤油で煮て味をつけたもの。）を作るために使用している方がいます。



ヒラショウギ

森 近司 氏寄贈

うどんやそば等をゆでた後、盛り付けるのに使います。人が大勢集まるときに、茶碗を入れて持ち運ぶお盆がわりに使うなど、幅広く活用されています。

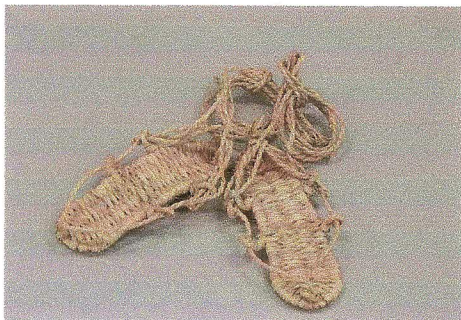


ミソコシザル

森 近司 氏寄贈

名前のとおり、味噌をこすためのザルです。粒味噌が多かったので、これでこして使っていました。しかしそれだけではなく、豆腐屋に豆腐を買いに行くときや、八百屋、魚屋などへの買い物の時に入れ物として持っていくなど、重宝に使われました。





わらじ

伊草 進 氏寄贈

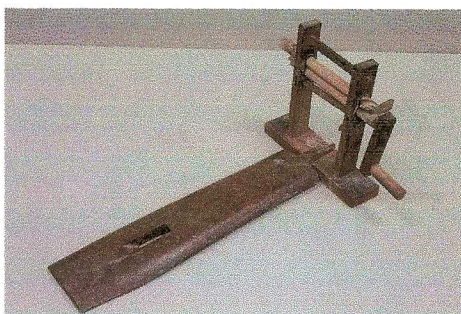
農家の夜なべ仕事や農閑期の作業として、ワラを使ったものがいろいろと作られていました。

わらじは、日常的に履いて使うために作られていました。材料はうるち米のワラを使うことが多く、特に丈夫にするために念入りに作る場合は、布を織り込んで作りました。

ビク

折原 一 氏寄贈

備前堀川での魚つりの際に、つった魚を入れる道具として使用していたものだそうです。今では、竹製のビクを使っている姿を見かけることはなくなりました。



ワタクリ

伊草 英男 氏寄贈

綿の中には種が入っていますが、この綿の繊維と種を分けるための道具です。二つの丸い棒の間に実つきの綿を差し込みながら取っ手を回すと、綿の繊維だけが向こう側に行き、種は間を通り抜けることができないので手前に落ちま

す。こうやって、綿の繊維と種を分けます。 繊維と種と分けたあとは、繊維は「綿打ち」をして布団を作ったり、木綿糸を作って機織りをして自家用の着物を作ったりしました。

鏡

野口 丈吉 氏寄贈

弥生時代から古墳時代にかけて中国から伝えられた鏡は、型を使って鋳出すといった作られ方をしました。江戸時代の頃には、鏡背全面に装飾文様を入れるようになり、鏡師が創意工夫した絵柄が入れられるようになりました。

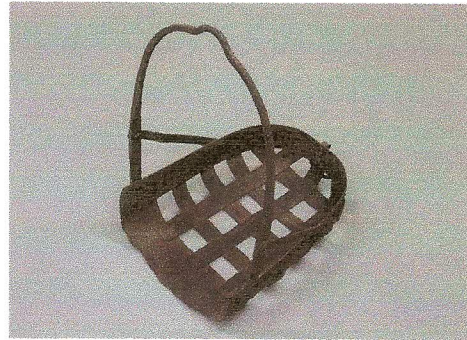
現在私たちが使用している鏡はガラス製ですが、この技術は明治時代に西欧からはいつてきたものです。



ノロアゲジョレン

関根 義一郎 氏寄贈

ホツツケ（堀上田）において、土をすくいあげるのに使っていました。一般的なジョレンに比べてひとまわり大きく、長い柄をつけて使用しました。土地改良や開発などの結果、ホツツケが埋められてしまったために今では使われることはなくなりました。



アイロン

白川 由利子 氏寄贈

昭和40年代に使用されていたものです。今の製品と比べてとても重くどっしりとしています。まだ蒸気を出す機能がついていませんので、強いしわを伸ばすときには布に霧吹きで水を吹きかけながらアイロンがけをしていました。重

いため、主婦にとってはアイロンがけも大変な作業の一つでした。

婚礼衣装

金子 和生 氏寄贈

最近の結婚式は式場で行われることがほとんどですが、昭和30年頃までは、自宅で行われることがほとんどでした。結婚が決まると、婚礼衣装や道具などを整え、輿入れの際に持参しました。



トウミ

折原 一 氏寄贈

風力を利用して、穀物の精粒とくず粒と藁くずなどを分ける機械です。二人一組で作業をしました。動力による機械が発明されるまで使われました。

（旧斎藤家に展示してあります。）

箱階段

野口 丈吉 氏寄贈

商家に伝わるもので、二階に昇るための階段の下に戸棚や引出しをつけたものです。階段下の空間を巧みに物入れとして生かしています。

（旧斎藤家に展示してあります。）

戦時下の暮らし

今は店に行けば自分の好みに合わせて、好きなものを選んで自由に購入することができますが、国の統制のもとで「自由に」ということができなかった時代もありました。

1937年（昭和12年）7月、中国の北京郊外でおきた日本と中国の軍隊の衝突をきっかけに、日本と中国が全面的な戦争状態（日中戦争）になりました。さらに、第二次世界大戦（太平洋戦争）へと戦争が長期化するにつれ、庶民の生活も食料・衣料・日用雑貨などの物資の欠乏が深刻になっていきました。国民の生活にはさまざまな統制がおこなわれ、昭和15年には「ぜいたくは敵だ」のスローガンが叫ばれるようになり、日常的に必要なではない嗜好品や贅沢品は生活の中から姿を消し、質素儉約が美德とされました。戦時下での生活は今では想像もつかないものでした。

太平洋戦争の終結から半世以上が過ぎ、戦時下の生活を直接知る人も少なくなってきました。当時の生活の証言者を展示します。

報国債券

杉山 文蔵 氏寄贈

政府は、戦争の長期化にともなう軍需産業の生産力拡充に多くの資金を必要としました。大蔵省を中心に強力な資金統制を行うとともに、少額の債権を大量に発行することにより、その資金を国民に求めたのです。貯蓄や国債の購入運動を、国民の戦意を高めるためのものとして展開していきました。これらの債券は、「太平洋戦争」中に発行されたものです。残された史料を見ると、昭和17年8月21日から翌18年4月20日の9ヶ月の間に、5回も発行されていることがわかります。このほかにも違った名前や違う発行先から、こうした債券がひんばんに発行されました。



衣料切符・砂糖購入券

杉山 文蔵 氏寄贈

戦争が長引くと、生活物資が不足し、その値段も高騰しました。政府は、経済統制にふみきり、国民の生活に必要な最低限度の品物が公平に手元に渡るように保証し、人心の安定を目指しました。

昭和16年（1941年）4月1日、「生活必需物資統制令」が交付され配給統制が全面化されると、マッチや砂糖、衣料品などの購入の際

には、あらかじめ配布された切符や購入券がないと買うことができなくなりました。また、その数や量も決められました。しかし実際は、「ぜいたくは敵だ!」「衣料は節約、切符は献納」の言葉のもと、新調することは贅沢な行為とされたために、衣料切符を使用して新調するということはなかなかできませんでした。

歴史・文化を伝える

ここでは、宮代町だけに限らない、そんな歴史の証言者を展示しました。

奈良薬師寺大講堂の瓦

亀田 朔 氏寄贈

この瓦は、奈良県にある薬師寺の大講堂の瓦です。この大講堂は江戸時代の嘉永5年（1852年）に建設され、平成7年6月に解堂（解体）されました。（平成14年に再建の予定です。）瓦は、この講堂に納められていた薬師三尊像修復完成の記念として寄贈者におくられたものです。この瓦は職人の手作りなのでずっしりと重く、100年以上も風雪に耐えてきた丈夫さも持ち合わせています。

ちょっと前までは、一般家屋の屋根にも瓦がよく用いられてきましたが、建築工法や使われる部材がかわってきているため、屋根の材料も丈夫で軽量の材質で作られたものが使われるようになってきています。



さいたま県民だより

渡辺 重義 氏寄贈

ご寄贈いただいた「さいたま県民だより」は、昭和46年の8月に発行された26号からその綴りが始まっています。この年の11月は埼玉県がうまれてから百年にあたるために、特集号がつけられました。埼玉県誕生百年を記念して「11月14日」が「県民の日」に定められたことが掲載されています。この他、別の号には「埼玉百年記念事業」として「さいたま水上公園」や「県立博物館」等が完成したことを伝える記事などが掲載されています。

また、第28号（昭和47年1月発行）まではタイトルが「さいたまけん」となっていますが、第29号（昭和47年5月発行）から「さいたま県民だより」に改められています。

プラモデル

(アップル文庫さん寄贈)

昭和30年代に発売されたプラモデルは、飛行機や自動車などのほか、当時のはやりのキャラクターを模型にしたものなどが発売されました。プラスチックで出来た部品をくみ上げて作ることから、子供達のおもちゃとしてだけでなく、大人でも楽しめるほど細かい細工が必要なものまで、今でも根強い人気があります。



展示品リスト (敬称略)

資料名	寄贈者	資料名	寄贈者
オニオロシ	折原 一	アイロン	白川 由利子
ヒラショウギ	森 近司	婚礼衣装	金子 和生
ミソコシザル	森 近司	箱階段	野口 丈吉
わらじ	伊草 進	報国債券	杉山 文蔵
ビク	折原 一	衣料切符・砂糖購入券	杉山 文蔵
ワタクリ	伊草 英男	奈良薬師寺大講堂の瓦	亀田 朔
鏡	野口 丈吉	さいたま県民だより	渡辺 重義
ノロアゲジョレン	関根 義一郎	プラモデル	アップル文庫

参考文献

「埼玉県民俗工芸調査報告書 第11集 埼玉の竹細工」埼玉県民俗文化センター

「特別企画展 戦争と庶民生活—欲しがりません勝つまでは—」埼玉県平和資料館

「岩槻市史 民俗史料編」岩槻市役所

「幸手市史 民俗編」幸手市教育委員会

「川越市史 民俗編」川越市

「台所道具いまむかし」小泉和子

「国史大辞典」吉川弘文館

「第8回企画展 なつかしのおもちゃ」朝霞市博物館

「日本民俗事典」弘文堂